声の文化としてのオルティン・ドーの変容
―伝統的歌唱表現の変化とその受容に注目して―

策　力　格　尔
東京学芸大学連合大学院学校教育学研究科学校教育学専攻　博士課程

緒　　言

モンゴルは、無文字社会であった時代はもとより、近年に至って国民の識字率が向上するまでの間、ほとんど口承文芸の世界に生きていたといっても過言ではない[1)]。中国内モンゴル自治区では近代教育の普及にともなう識字率の向上により、声の文化である口承文芸が文字の文化へと移行しつつある。

モンゴルの口承文芸の一つであるオルティン・ドーはモンゴルを代表する伝統声楽音楽として広く認識されてきた。多民族の文化との融合、近代化、都市化が進むことにつれ、定住生活様式が中心となり、または西洋音楽を含む多様な文化の影響が顕著になってきたことがオルティン・ドーの遊牧文化を代表する声の文化としての性格に大きな影響を与えたと考えられる。現代において、オルティン・ドーは大きく伝統的スタイルと舞台化されたスタイルに分けられる。伝統的スタイルは遊牧地域を中心に、舞台化されたスタイルは都市部を中心に伝承され、受容されているのが現状である。

遊牧社会の衰退によって伝統的スタイルのオルティン・ドーの伝承は危機に直面している。一方、新たに樹立された舞台化されたオルティン・ドーは最初の西洋声楽音楽との融合への偏りから独自の表現手法への探索など多くの課題を抱えている。このような状況の中、オルティン・ドーの独自性を保っていく上で、伝統的スタイルのオルティン・ドーと多様な文化の要素を吸収された舞台化されたオルティン・ドーの差異を明らかにし、または両者の関連性を解明する必要が生じてくる。

本研究では、オルティン・ドーの現代における変容の一断面を捉える事象として、伝統的スタイルと舞台化されたスタイルの習得過程、歌唱表現の差異に注目することにした。

方　　法

本調査では、内蒙古自治区フフホト市、東ウジュムチン旗[2)] サーマイソム[3)] におけるオルティン・ドーの歌い手たちを調査対象とし、それぞれのオルティン・ドーの習得過程、歌唱表現に着目し調査を行った。

本研究の調査手続きは以下である。

調査内容：歌い手のオルティン・ドーの習得過程、日常の生活経験、一般的な教育状況、歌唱表現の観察、演奏会の録音など。

調査期間：2012 年 8 月 15 日から 9 月 28 日まで。

調査地：中国内モンゴル自治区フフホト市、シリンゴル盟東ウジュムチン旗サーマイソム。

調査手法：聞き取り調査と観察による。聞き取り調査は「対話」方式で行い、放牧している時、儀礼の場など様々な日常的な生活場面において行った。観察は歌い手の日常生活に関して断続的に行った。歌声の聴取印象分析は生演奏、映像、音源試料などを分析した。

調査対象：東ウジュムチン旗サーマイソムに住む遊牧民歌い手の 4 名とフフホト市を中心に活動を行っている舞台歌手の 6 名の歌い手たち。

結　　果

調査から、伝統的スタイルの歌い手たちが *nair*「ネール」[4)] の場を中心にオルティン・ドーを習得してきたことがうかがえる。「僕たちの歌は　*Urug horim*（モンゴル語で婚礼という意味）に参加することによって蓄積されて来た」[5)] などの例である。婚礼など儀礼の場における習得経験を裏付けるような発言は聞き取り調査の中で伝統的スタイルの歌い手たちの間で多く見られた。

「ネール」はウジュムチン部族の伝統文化の重要な構成要素である。「ネール」とは年間通して行われる様々な儀礼活動の通称であるが、オルティン・ドーは、この「ネール」において重要な位置を占める。ウジュムチン部族の「ネール」において、オルティン・ドーはコミュニティーに帰属する人々の行為に秩序を付ける意味を持つ。すなわち、オルティン・ドーを歌唱するという行為

を人生通過儀礼として、または遊牧生産業のしきたりの秩序が構築するという役割を持っている。「ネール」は、「ネール」参加者たちによる秩序化の範型なのである。

従来、ウジュムチン・オルティン・ドーは遊牧社会の儀礼の場—「ネール」において伝承されてきた。オルティン・ドーの伝承の不変性を保つために、以下の二つの規制力が働いていると考えられる。一つは、コミュニティーの中でレパートリーを数多く持つ長老などをリーダーとし、そのリーダーたちの歌唱するレパートリーを「ネール」参加者全員が模倣し、頻繁に繰り返すことである。もう一つは、コミュニティーの儀礼の回数を年間通して一定の水準に保つことである。

「ネール」においては、厳しい規則が定められている。「ネール」に参加する人々はリーダーに対して絶対の敬意を払わなければならない。また、「ネール」のすべての参加者にオルティン・ドーを歌うことが求められる。歌うことを拒むことは「ネール」においてタブー視されてきた。子ども、若い世代は「ネール」に参加することでオルティン・ドーを自然に身につけていくことができる。「ネール」における歌唱経験を積み重ねていくことで、成人になる際、豊富なレパートリーを蓄積することができる。厳密な構造、秩序を構成することによって、参加者たちのより自然且つ非固定的な習得過程を形成していく。

一方、舞台化されたオルティン・ドーの習得過程は一定の時間を通して専門教育機関において歌唱技法を習得することを主としている。中国内モンゴル自治区において、オルティン・ドーが舞台音楽として登場したのは1950年代のことである。以来、プロの歌手を育つ専門教育機関が設立され、今はオルティン・ドーを世界に発信するための重要な出発点とされている。オルティン・ドーが舞台化される過程で、様々な変化を遂げて来た。伝統的スタイルから大きく変化したのは、西洋音楽に影響されたことが一大要因であろう。近年、専門教育機関の指導者たちは試行錯誤を繰り返しながら、独自の舞台音楽のスタイルの確立を目指して来た。

舞台化されたオルティン・ドーは伝統文化を母体としているが、ベルカント唱法、中国民族唱法などの要素を取り入れ、舞台鑑賞に適した歌声の響きを追求していることによって、パフォーマンスや歌声に大きな変化が起きている。例えば、レパートリーの激減、聴者を過度に意識した舞台表現、音楽性ではなく、技法を重視する傾向が見られる。

このような習得過程の根本的違いから、歌唱表現の差異が生じたと考えられる。伝統的スタイルの歌い手と舞台歌手の演奏をコンクールやコンサートの現場の記録や映像の比較分析をした結果、平均的に伝統的スタイルの歌い手の身体感覚がより自然的に捉えられ、口の開け具合などが小さく[6)]、顔や身体の動きが控えめであった。それに対し、舞台歌手の中では、口の開け具合が大きく、顔の表情が豊で、観客をより意識しているような身体のパフォーマンスが多く捉えられた。演奏スタイルだけではなく、レパートリーの蓄積に関しても大きな変化が見られた。

両者の声の音色からも明確な違いが観察されている。西洋の声楽においては、曲全体に一定の音色を保つことが前提となるのに対し、オルティン・ドーは地声発声が基本であり、また一曲の中で音色は頻繁に変換されるのが特徴である。喉頭、声門の強い関与を必要とする伝統的発声に対し、舞台歌手の発声は西洋の頭声的な発声に偏っている。舞台歌手の歌声のスペクトルおよびホルマントはほぼ一定水準に保たれ、音色の変化が少ないことを示している。したがって、両者の主観的聴取印象も異なる。舞台歌手が頭声的発声をすることで、オルティン・ドーの象徴的技法とも言われる装飾音 trill の発声に必要な激しい喉頭運動への変換ができなくなる、あるいは喉頭運動が弱くなる傾向が観察された。今回収録対象の歌い手は２名であり、歌い手の個人差もあることも考慮し、以上述べた結果が一般的とは言えない。今後の課題として、より多くの音声試料を分析し、検討していく必要がある。

要　　約

今回の調査を通して、伝統的スタイルと舞台化されたオルティン・ドーの習得過程、歌唱表現において多くの差異が認められた。伝統的スタイルのオルティン・ドーの身体性が遊牧生活の脈略の中で培われ、従って音楽も遊牧生活の日常的・非日常的世界に深く関わっている。伝統的スタイルのオルティン・ドーは口伝えで伝承されているため、表現、レパートリーの豊富さ、歌い手の個性が十分に維持されていくのに有利である。しかし、近代化、グローバル化による遊牧社会の衰退、崩壊に従い、伝統的スタイルのオルティン・ドーの継承がますます困難に陥っている。この場合、都市部による舞台化されたオルティン・ドーの伝承は主な伝承手段になっていくため、現代のオルティン・ドーの伝承は遊牧社会の中で維

持されながら、また同時に舞台音楽としてのスタイルが樹立されていく傾向が見られる。

今後、伝統を保持しながら、変化しつつある舞台音楽としてのオルティン・ドーを受け入れると同時に、オルティン・ドーに対する学問的アプローチの進展が望まれる。

謝　辞

本研究を遂行するうえで、公益財団法人三島海雲記念財団様より助成金をいただきましたことに、心よりお礼申し上げます。奨励金によって、現地に向かい、より長期間の広範囲な研究調査を実施することができました。関係者の皆様に深く感謝致します。

引用・参考文献

1) 蓮見治雄 : チンギス・ハーンの伝説―モンゴル口承文芸―、p.60、角川書店、1993.

2) 旗（モンゴル語ではホショー）とは、清朝以降におけるモンゴル民族を組織する行政単位の一種を指す。現在は、中国の県に相当する行政区分だが、清朝からの呼称を援用している。

3) ソムとは旗と村の間にある行政区分を指す。

4) *nair*「ネール」とは時間的、空間的一定の広がりを持つ規範的な人間の祝祭行為を指す。小長谷有紀：モンゴル万華鏡―草原の生活文化―、pp.38-74、角川書店、1992を参照。

5) 2012 年 9 月 14 日に東ウジュムチン旗サーマイソムの年長の歌い手に対象としたインタービューによるもの。

6) モンゴル民謡の歌唱において、口の開け具合いが小さくしかも声量が一定水準に出ている場合、歌唱技術の成熟の徴として見なされている。